

Book Review

歯冠修復治療の テクニカルリクワイヤメント

桑田正博 著

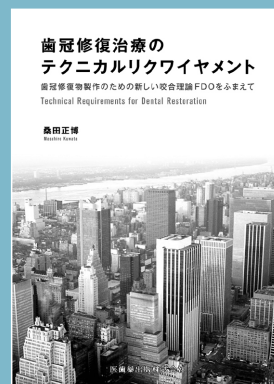


Reviewer

大河雅之 Masayuki Ohkawa

(東京都・代官山アドレス歯科クリニック)

A4 判, 256 頁
カラー
定価 24,200 円
(本体 22,000 円+税 10%)
医歯薬出版刊



桑田先生は、本書の CHAPTER 8 (The Story of My Life and Porcelain Fused to Metal Crown) の冒頭に、哲学者の森信三氏の言葉を紹介している。

“人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。

しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時に”

本著を読み終えた直後、私の脳裏には文中の典拠であるこの言葉が蘇ってきた。

私はこのコロナ禍前の 10 年くらいの間、およそ 3 カ月に一度くらいの頻度で講演、ハンズオン、または自身の勉強のためにさまざまな国々を訪れる機会に恵まれた。結果、多くの海外の歯科医師、歯科技工士など歯科関係者の知己を得た。

そのなかで、世界の歯科界で最も知名度が高く尊敬を集めている日本人は、桑田正博先生であることを身にしみて実感した。誤解を恐れずに言うならば、日本国内よりも海外での評価が遥かに高く感じられるくらい圧倒的である。数年前、ロシアで講演させていただいた時も、私の通訳のロシア人の歯科医師が、いつもは桑田先生の通訳をされている方だそうで、たいそうな桑田先生への心酔ぶりに驚かされたの

は私の記憶にまだまだ新しい。

そもそも欧米では、歯科に限らずであるが、その業界のレジェンドに対する人々のレスpektが日本に比べると格段に高い。私が所属している EAED (ヨーロッパ審美歯科学会) においても Dr. John McLean Honorary Lecture と Peter Schärer Treatment Planning というプログラムが毎年組まれており、現代補綴歯科学草創の二人の巨人を顕彰している。

桑田先生も一言で言うならば、本書に詳しいように『金属焼き付けポーセレンの研究により審美歯科の扉を開いた歯科界の偉人』ということになるであろう。

本書は期せずして桑田先生の最後の自著となってしまったわけだが、その内容は氏の歯科人生の集大成と呼ぶにふさわしい。『歯冠修復治療のテクニカルリクワイヤメント』という本著のタイトルが示すとおり、彼が人生を捧げて培った貴重な学問、技術を惜しみなく紹介されているだけでなく、加えて自らのバイオグラフィーを詳述されており、現代歯科の歴史的記録としても価値のある一冊となっている。1962 年に愛歯技工士養成所から日本の歯科医学の将来を託されて派遣された初渡米以来、一時帰国後の再渡米を

含めた 8 年間のアメリカ生活での彼はまさに全世界の歯科の発展のために選ばれた人としき言いようがない活躍を見せている。

それは前述したように、Katz 夫妻との出会いと彼らとの共同による“金属焼き付けポーセレンの研究”により、その技術を完成させたこと、そして Dr. Schuyler, Dr. Wagman, Dr. Strausberg, Dr. Stein, Dr. Thomas ら、当時アメリカでジャイアンツと言われた歯科医師たちと出会い仕事をする機会のなかから、『最善の歯科医療を行うのには何が大切なのか』を臨床を通じて学び本書の副題にあるように、“歯冠修復物製作のための新しい咬合理論 FDO (Functional Discluded Occlusion)”の創造へと至る礎を造られたことであろう。

まさしく、冒頭で述べたように、彼らとの運命的“出逢い”を通じて桑田先生は現代補綴歯科のレジェンドの一人となるべく生かされ人生を送られた。そして遺稿となった本書を通じて、今を生きる臨床家に、氏の歯冠修復および咬合の知識、考え方、技術、また歯科人としてのフィロソフィーを余すことなく語り、継承と発展を託す渾身の一冊といえる。特に将来の歯科界を担っていく若い先生方に読んでいただきたい。